2020 年度学位記・修了証書授与式 学長式辞

2020 年度、東京理科大学学位記・修了証書 授与式にあたり、学長として、ご挨拶申し上げます。

卒業生の皆さん、大学院を修了される皆さん、卒業・修了おめでとうございます。新型コロナウイルス感染症が蔓延する中、学生の安全と健康を最優先に、構内への立ち入りを制限し、講義はオンライン化するなど、制約の多い環境で、教育・研究活動を行なわざるを得ませんでした。大学にとっては、事業継続性を問われる死活問題でした。そのような困難を乗り越え、皆さんが、今日を迎えられたことに、教職員一同、大変嬉しく、心からお慶び申し上げます。また、本来であれば、この会場に参列頂けたであろう、ご家族の皆様をはじめ、関係の方々にもお祝い申し上げるとともに、ご協力頂いた多くの皆様に、深く感謝申し上げます。

現在、私たちを取り巻く社会環境は急激に変化し、政治、経済、国際情勢、全てにおいて不透明な状況が続いています。パンデミックのみならず、大規模災害、地球温暖化、産業構造の急激な変化、格差の拡大など、国内外の問題は複雑化し、深刻さを増すばかりです。私たちは、社会の一員として、どのように対応すべきかを真剣に考え、行動を起こす時が来ています。大学についても同様で、如何に社会に貢献し、責務を果すかが問われ、部局の枠を超えた教育・研究分野の再編、産官学の組織的な連携など、多様な取り組みが求められています。如何なる環境下でも、教育の質を担保し、研究の高度化を図ることが、大学の存在意義であり、喫緊の課題となっています。

視点を世界に向け、国連で採択された 2030 年に向けた「持続可能な開発目標：SDGs」を考えてみましょう。SDGs には、我々が認識すべき社会的課題と目標が示されていますが、明確な解決方法が示されている訳ではありません。我々が、様々な取り組みに積極的に関与し、課題を解決していく必要があります。大学には大きな期待が掛かっています。2020 年からを、「行動の 10 年」と位置づけ、目標達成に向け、科学技術イノベーションを、どのように活用していくか、どの

ような分野に投資していくか、世界的規模での取り組みが進んでいます。産業界、大学、公的研究機関等、多くの利害関係者の連携による、「共創の場」の形成が必要です。

開かれた大学として、それらの課題解決に向けた取り組みを実行し、参画していくには、不断に外部の意見を取り入れ、真摯に耳を傾け、自らを改革していくべきです。あるべき未来を思い描き、その目標に向けて、行うべき教育・研究内容を構成していく必要があります。「社会の公器」として、透明性を高め、社会への説明責任を果たすとともに、組織的な産官学連携を行い、着実に教育・研究の現場に学内外からの投資を呼び込むことが重要です。特に、教育による利益が、個人を超えて社会的な便益に及ぶ科学技術分野では、公的な補助金、共同研究経費などの導入により、財務的に強化し、教育機会の公平を図る必要があります。その為にも、皆さんの研究活動とその成果が大きな意味を持つことになります。

東京理科大学は、「学問の自由」を社会から負託され、科学技術研究を推進し、次世代に引き継ぐための人材を育てる場です。学術は過去の膨大な研究の上に成り立っており、誠実性は、研究遂行上、最も重要です。皆さんは学位論文をまとめ、公表し、本日の卒業・修了に到達されました。地道な作業を粘り強くこなし、人類社会に貢献されたことに、敬意を表するとともに、本学としての最も重要な作業に参加頂いたことに、感謝したいと思います。

ここで、本学の歴史を振り返ってみましょう。1881 年、東京大学を卒業した若き理学士らによって「理学の普及」を目的に設立された東京物理学講習所をその起源としています。その後、東京物理学校に改称、自律的精神の下、幾多の困難を乗り越え、民主的に維持運営されてきました。設立者の理学への気概と情熱は、学生にも共有され、力がついたものだけを社会に送り出すという「実力主義」の学風が形作られ、今でも脈々と受け継がれています。

戦後、東京物理学校は東京理科大学となりました。鉄の神様と呼ばれ、東北帝国大学総長を務めた本多光太郎が初代学長に就任し、「学問のある所に技術は育つ、技術のある所に産業は発展する、産業は学問の道場である」と喝破し、研究力の高い大学に発展させるとともに、社会に役立つ大学を目指しました。卒業生

たちは、教育者、技術者、研究者として、日本はもとより、世界で活躍し、科学技術の発展に貢献しました。社会に出て、第一線で活躍される皆さんへの期待は大きいと思います。

大学は自律した個人の集団です。研究者は、主体的、自律的判断により行動しており、自律性と多様性が学術の発展には不可欠であることを、歴史の教訓から学んでいます。しかし、各専門分野に閉じ籠っていては、学術的発展も無ければ、直面している課題解決も出来ません。大学組織は、自律分散しているだけでなく、協調して活動できる仕組みを持つ必要があります。そうした活動を有効にするのは、的確な投資に加えて、明確な目標の設定であり、それを支える教養です。

社会も同様です。本学の「実力主義」の教育で、幅広い教養と科学的思考力を身に付けた皆さんが、自ら考え、自ら行動を起こし、積極的に、社会を取り巻く様々な解決に取り組まれることを望みます。

皆さんは、卒業、または修了し、学位を取得されますが、皆さんの学位記は、今後も皆さんとともに、世界が抱える課題を解決して行こうという「約束の証」です。皆さんの人生の中で、新しい挑戦に向けて「学び」が必要と思う時が、来るでしょう。その時には、理科大に戻って来て下さい。我々は、常に皆さんの活動を支援することを約束します。

本学は、2031 年に創立 150 周年を迎えます。「TUS VISION 150：日本の理科大から世界の理科大へ」を掲げ、これからの 10 年を「行動の 10 年」と位置づけ、高い研究力を以て、社会的課題に挑戦し続ける大学でありたいと願っています。

東京理科大学は、現在の構成員だけの組織ではありません。将来の学生にとり、本学を、より良い教育と研究の場とするため、同窓生として、ご協力頂きますようお願いするとともに、皆さんの益々の活躍を祈念して、式辞とします。

2021 年 3 月 18 日

東京理科大学

学長 松本 洋一郎